

2 むつ市の教育の現状と課題

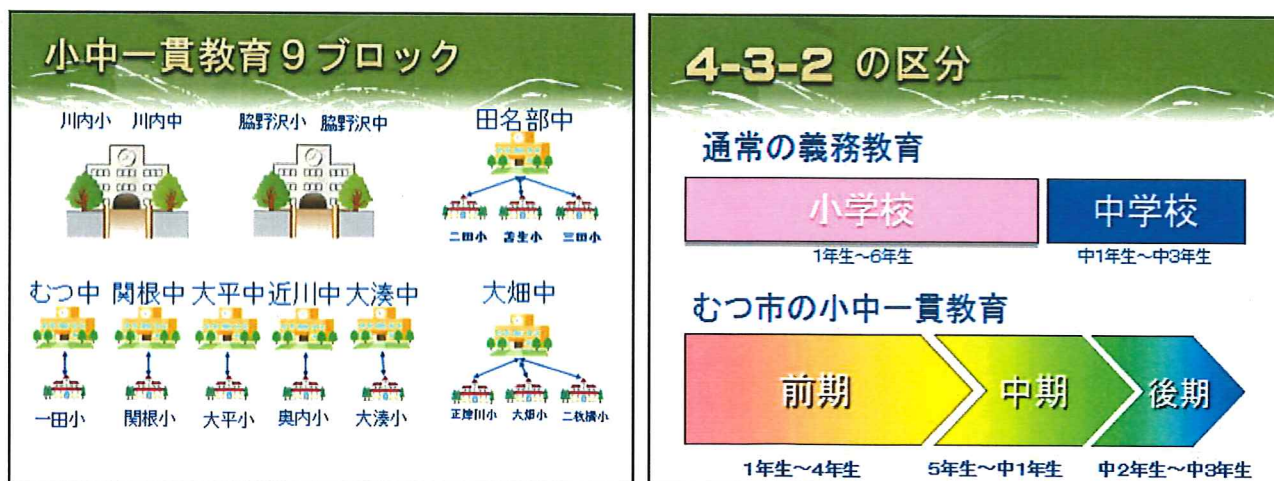
むつ市は、平成16年度の市町村合併によって県内最大の面積を有する自治体となりました。平成19年度には、児童生徒数の減少に伴う学校統廃合や課題となっていた学力の向上、生徒指導上の問題の解決を図るべく、「むつ市教育プラン」を策定し、その実践に取り組んできました。

「むつ市教育プラン」では、むつ市内の小学校・中学校全てを9つのブロック*2に分け、施設一体型*3、施設分離型*4の形態で小中一貫教育を導入することとし、9年間の小・中学校教育課程を前期4年（小1～小4）、中期3年（小5～中1）、後期2年（中2～中3）の4-3-2の区分と捉え、学習指導要領に基づきながらも、それぞれのブロックにおいて、学校、地域の実態に応じて教育活動を工夫・実践し授業の充実、生徒指導連携、行事交流などを通して、中1ギャップ*5の解消に努め、生きる力と夢をはぐくむ学校教育を推進してきました。

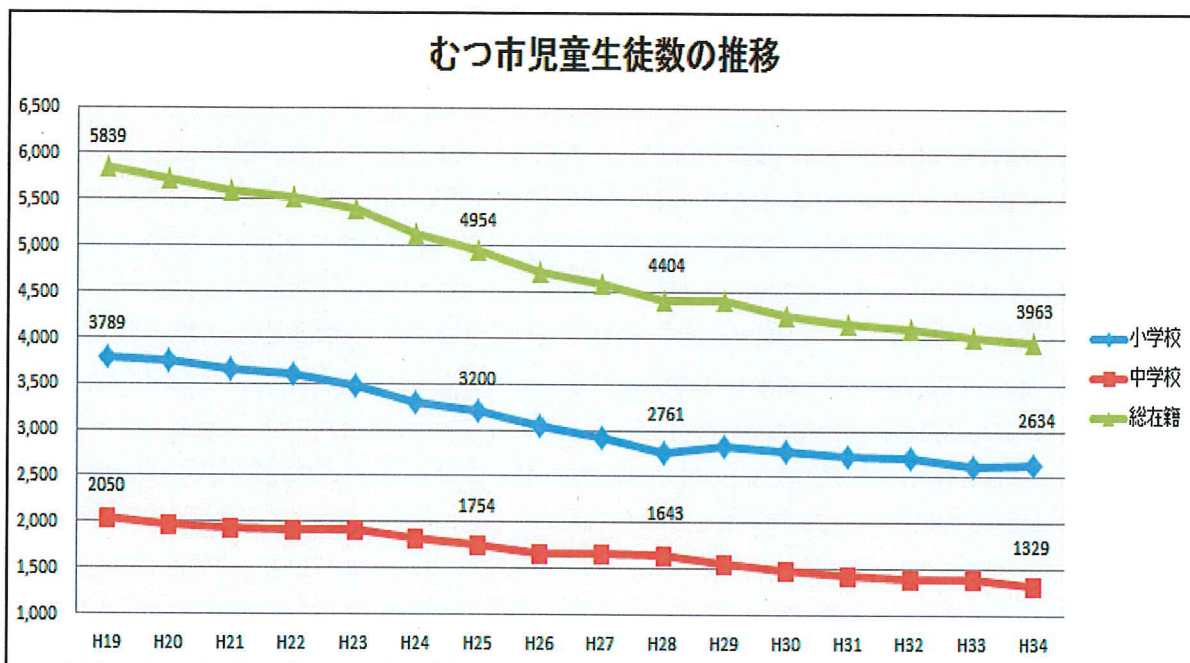
その結果、児童生徒の規範意識や望ましい人間関係の構築に係る意識の向上が認められ、課題となっていた生徒指導上の問題行動やいじめの発件数、不登校児童生徒数が減少傾向に転じました。落ち着いた学校生活環境の中で充実した教育活動が実践されるようになったのに伴って、学力に関しても全国学力・学習状況調査*6、青森県学習状況調査*7等の平均正答率が年次的に向上するなど、大きな成果が認められるようになりました。

しかしながら、児童生徒がこれからのグローバル化の進展や絶え間ない技術革新、少子高齢化や本市のさらなる過疎化等により、大きく変化する社会において、自らの力でたくましく生き抜いていくためには、こうした変化を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓（ひら）いていく力を身につけていくことが求められています。

したがって、今後も9ブロックの小中一貫教育を継続しながら、一人一人の可能性をより一層伸ばし、これまでの成果に加えて、新しい時代を生きる上で必要とされる資質・能力を確実にはぐくんでいかなければなりません。



(1) 児童生徒数の推移



平成19年度～平成34年度の児童生徒数調査表(平成28年5月1日現在)より

児童生徒の在籍総数を比較すると、平成28年度5月1日現在が4,404名、6年後の平成34年度には3,963名となり、今後6年間で441名の減少が予想されます。

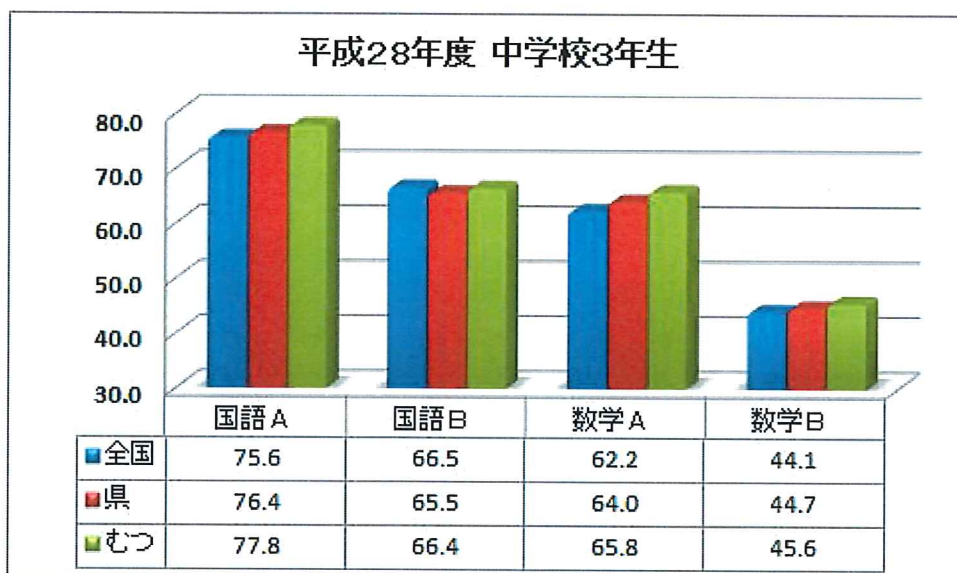
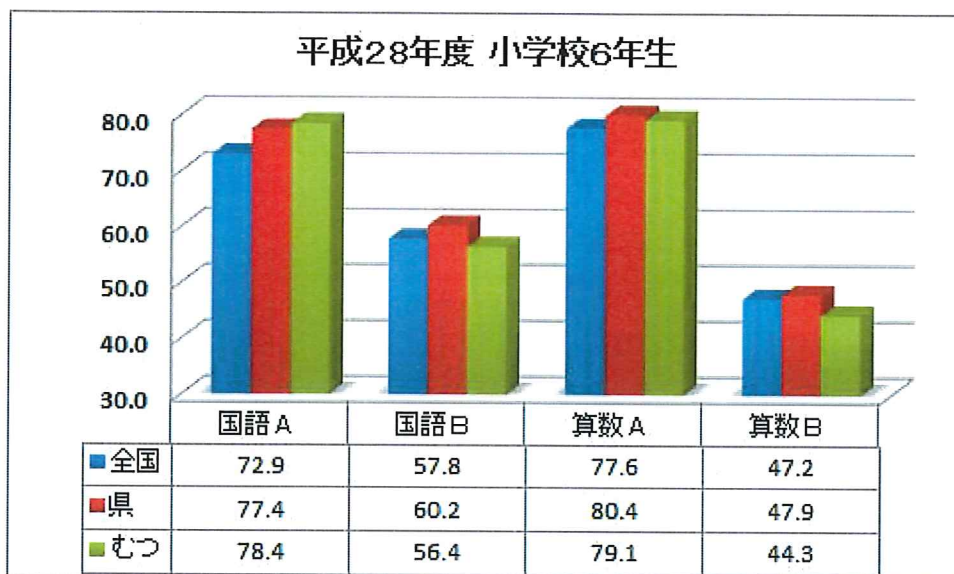
また、平成19年度から平成28年度までの10年間で、1,435名減少しておりますし、平成25年度から平成34年度までの10年間では、991名の減少が予想されます。



■ 二枚橋小学校 平成28年度入学式

(2) 学力の状況

① 平成28年度全国学力・学習状況調査から



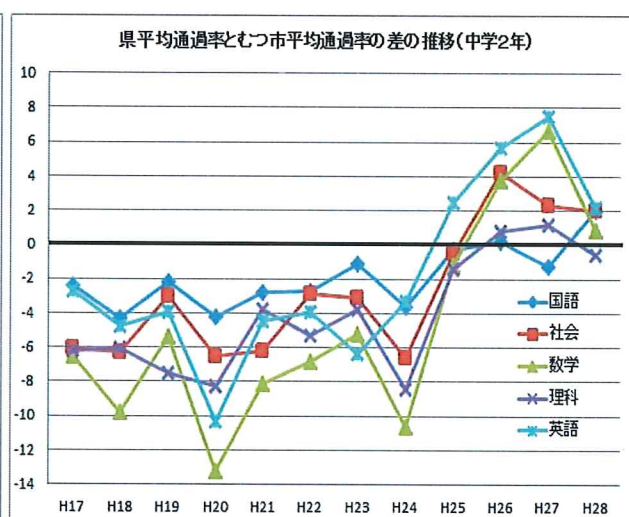
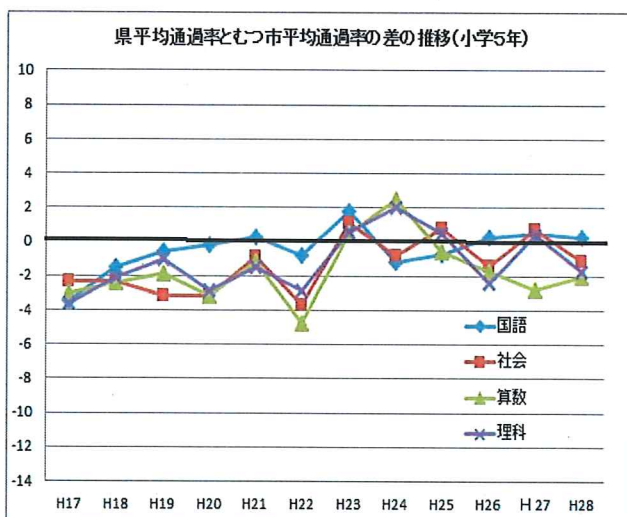
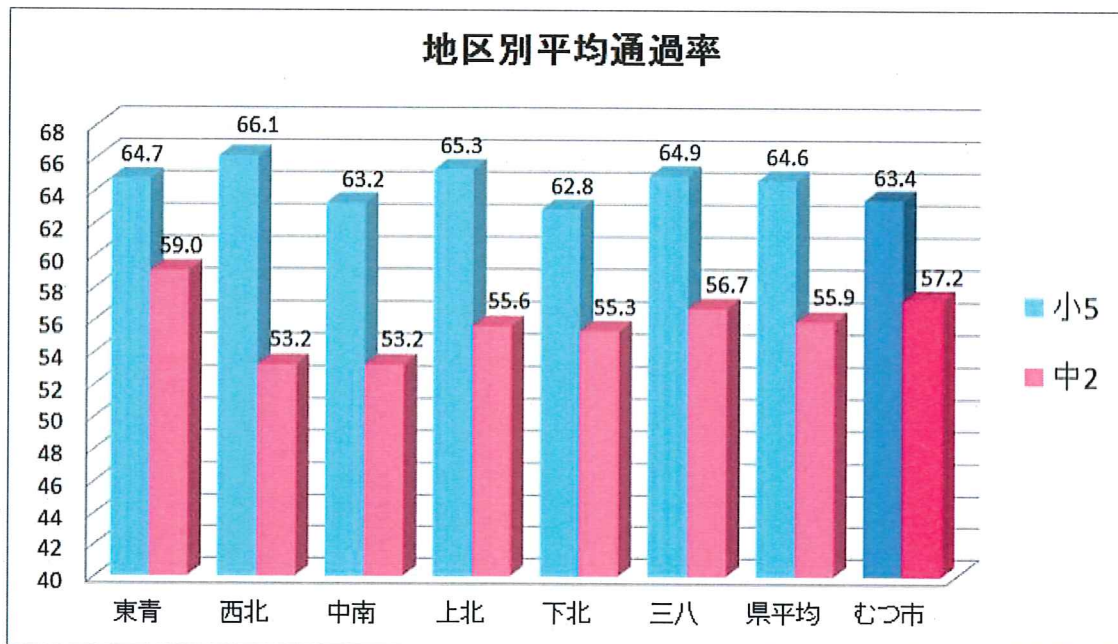
平成28年度全国学力・学習状況調査報告書より

平成28年度の全国学力・学習状況調査は、小学校6年生と中学校3年生を対象に、主として「知識」に関する国語A、算数A・数学Aと、主として「活用」に関する国語B、算数B・数学Bで行われました。

その結果、小学校6年生は国語Aが全国平均・県平均を上回り、算数Aが全国平均を上回りましたが、県平均には届きませんでした。また、国語Bと算数Bは全国平均・県平均に届きませんでした。

中学校3年生は国語A及び数学A、数学Bが全国平均・県平均を上回りました。国語Bは県平均を上回り、全国平均とほぼ同じでした。

② 平成28年度青森県学習状況調査から



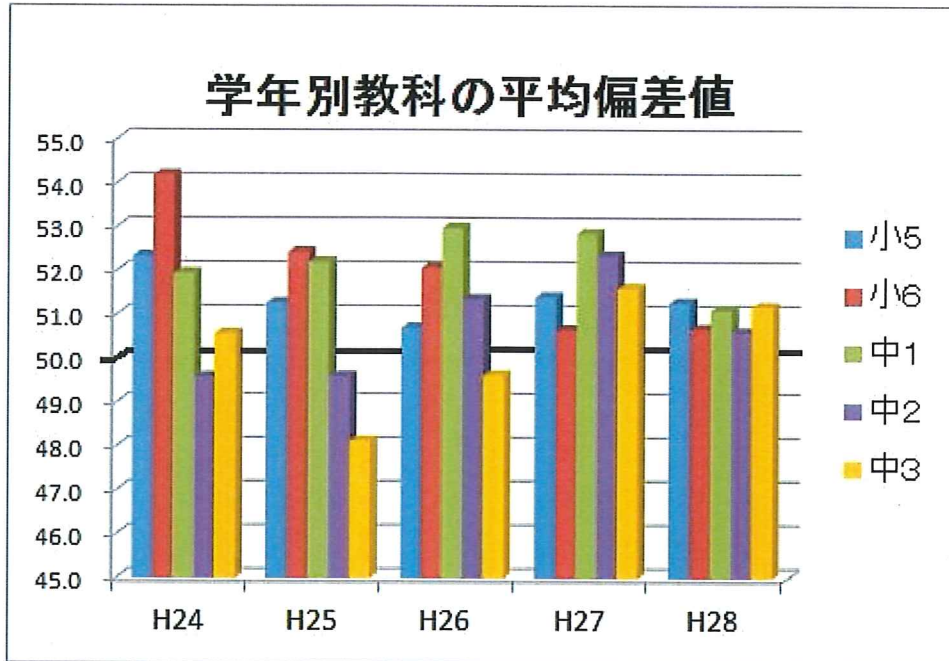
平成28年度県学習状況調査報告書より

青森県では、平成15年度から継続して、小学校5年生には国語、社会、算数、理科の4教科、中学校2年生には国語、社会、数学、理科、英語の5教科の学習状況調査を実施しています。

平成28年度県学習状況調査報告書によると、むつ市と他教育事務所管内・地区別平均通過率*8は、小学校5年生では県平均通過率に届いていませんが、中学校2年生では県平均通過率を上回り、市町村単位でも上位の成績となっています。

このように、教育プラン導入以前(平成18年度)には、県平均通過率と比較したむつ市の中学生の学力の伸び悩み(全教科平均の差-6.26ポイント)が課題となっていました。平成28年度には県平均との差が全教科平均+1.1ポイントに向上するなど、順調な成長が見られるようになっています。

③ むつ市総合学力調査(ベネッセ総合学力調査)の学年別比較



むつ市総合学力調査(ベネッセ総合学力調査)の結果について、平成24年度～平成28年度の学年別教科の平均偏差値*はグラフの通りとなっています。

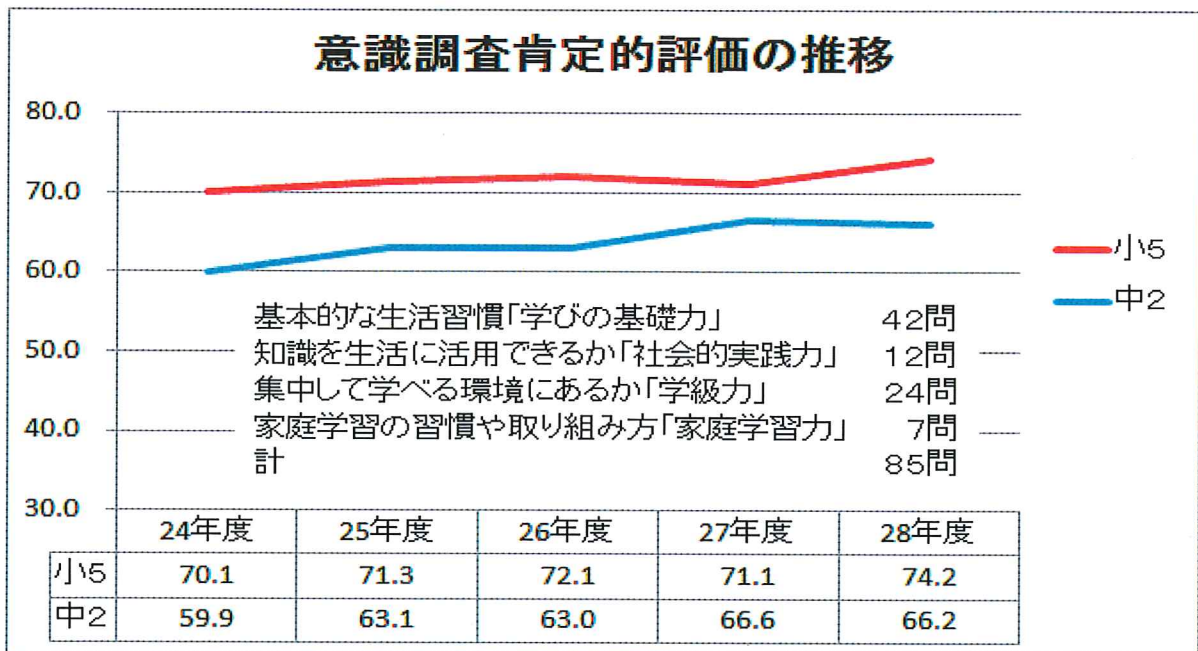
調査は4月に行われ、問題内容は前学年のものでありますので、中学校1年生の結果は小学校6年生の学習定着度を表しています。

平成24年度・25年度当時は、中学校2年生(中学校1年生内容)・3年生(中学2年生内容)の偏差値が他学年と比較して低い傾向となっており中1ギャップの影響がうかがえましたが、平成27年度以降は中学生の偏差値も50を超えるようになり中1ギャップの影響が見られないようになっています。



■ 大平小学校 授業風景

④ むつ市総合学力調査(ベネッセ)の意識調査



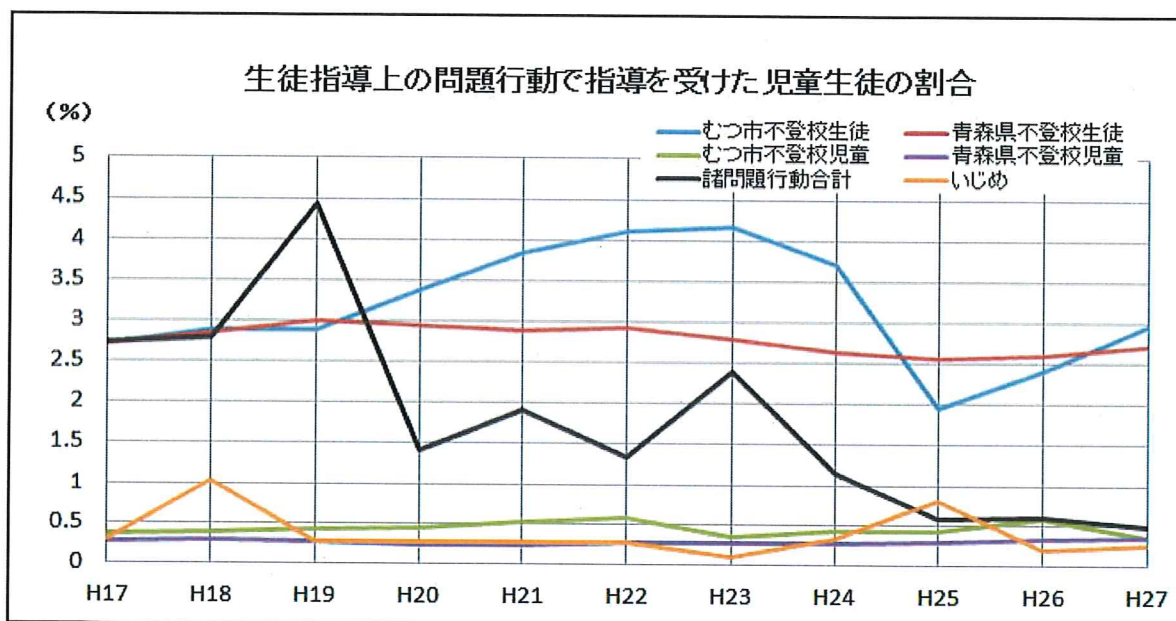
むつ市総合学力調査では、小学校5年生と中学校2年生を対象として意識調査も行われますが、この数値は、基本的な生活習慣を問う「学びの基礎力」、知識を生活に活用できるかを問う「社会的実践力」、集中して学べる環境にあるかを問う「学級力」、家庭学習の習慣や取り組み方を問う「家庭学習力」の4項目で肯定的な回答の値を算出し、平均値を求めたものです。

グラフが示すように、小学校5年生、中学校2年生の値は共に右上がりの傾向にあり、学習に対する意識の向上が定着につながっていることがわかります。



■ 大平中学校 文化祭

(3) 問題行動・いじめ・不登校児童・生徒の割合の推移



「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より

生徒指導上の問題行動で指導を受けた児童生徒の割合を年度ごとに比較すると、不登校以外の問題行動は、平成19年度をピークにして減少傾向に転じています。この傾向は、主に中学校で表れていることから、小中一貫教育の基に行われる様々な中1ギャップ解消のための取組により、子供達が小学校から中学校に進学しても、新しい環境下の学習や生活に適応しやすくなったためと考えられます。

また、不登校生徒も平成23年度をピークに平成25年度にはその割合を半減させることができました。これも同様に、中学校1年生の不登校生徒数を平成24年度と比較して、平成25年度にはその数を1/4に大きく減少させることができたことが要因となりました。しかし、平成27年度の不登校調査において基準が見直されたことによって再び県平均を上回るようになりました。

一方、不登校児童の発生率は、平成27年度には県平均と同率まで減少させることができましたが、その原因は多岐にわたり複雑化していることも多く、解決の難しい事例が増加しています。

さらに、いじめの未然防止につながる取組を強化していますが、いじめの根絶には至らないのが現状です。

したがって、「いじめはどの子供にも起こり得る、どの子供も被害者にも加害者にもなり得る」という調査結果を踏まえ、「いじめは絶対に許されない行為である」という共通認識を持ち、今後も温かい人間関係づくりを基盤とした学年・学級経営の充実に努めるとともに、小中一貫教育を通じた情報交換・情報共有を密にして、児童生徒に対する指導(働きかけ)が確実に引き継がれるような指導体制づくりを進めて参ります。

(4) むつ市の小中一貫教育の課題

本市の小中一貫教育は、おおむね望ましい効果を上げてきました。しかし、小中一貫教育ブロック事業実施報告書や意識調査等から、今後、小中一貫教育を更に推進・充実させていく上で、特に次の事項を課題として捉えています。

- ・会議・打合せの増加による教員の多忙化
- ・特別支援教育における一層の連携強化
- ・中学校への効果的な乗り入れ授業の在り方
- ・小学校高学年の教科担任制のより一層の充実
- ・小中一貫教育非常勤講師の量的・質的確保
- ・前期・後期の指導の充実
- ・合同行事での中学生の満足度向上
- ・保護者・地域へのさらなる情報提供と共通理解



■ 関根中学校 文化祭